

グローバルスタンダード

先日、ある企業の米国人幹部の方と話をする機会があった。彼は米国本社から東京に派遣されてきたのだが、最近日本へ派遣されてくる社員の方々の共通の悩みは、日本ではインターナショナルスクールが不足しており、子供に十分な教育の機会が与えられるかどうかかわからないことだそう。確かに、日本語が話せない人にとって、日本は決して暮らしやすい環境とはいえない。最近では日本へ進出する外資系企業も多くなり、教育の問題はかなり深刻になっているようだ。

ところで、わが国でもグローバルスタンダード導入の必要性が問われ始めて久しい。これは、世界中の企業や人々が理解できる考え方やルールを、日本の企業活動や市場に適用していくことであると認識している。

しかし、グローバルスタンダードがこれからの企業の生命線だとか、それに相応しいグローバルな人材の育成が不可欠だとかいっても、具体的にどうしていくべきかという明確なビジョンをもって話をしている人は意外と少ないのではないだろうか。グローバルスタンダード化とは、実はそんなに単純なものではないのかもしれない。

私の香港駐在時代のこと、香港に住む日本人駐在員の口から「香港のタクシーの運転手は広東語しか通じないのでどうしようもない」と嘆く声をたびたび聞いた。実際、英語も日本語も通じず、漢字の筆談が最も意思疎

通に役立った、という経験をもつ人が多いのも事実だ。しかし英語が通じた経験も決してゼロではない。英語で流暢に話されて、こちらが戸惑ってしまった経験も何度かある。改めて考えてみれば、香港のタクシー運転手は日本のタクシー運転手より、少なくとも平均的英語力は上かもしれない、といったら怒られるだろうか。

また、香港金融街のサンドイッチ屋さんの店員の英語力はすばらしかった。欧米人の難しい注文を聞き返すこともなく、見事に注文どおりのサンドイッチを作っていた。ひょっとして私よりも英語力は上ではないかと思うこともしばしばであった。

ビジネスでは言わずもがなである。少なくとも平均的な会社のマネージャー以上の人はほとんど英語をしゃべるのではないだろうか。香港の人たちは高等教育を受けていない人も含めて、日本人よりはるかに英語が達者で、かつ生活に密着して利用している現実は否定できない。

ここで、私はグローバルスタンダード化には英語が必須だから英語教育を充実すべきだと言うつもりはない。なぜなら今の日本の環境では、英語教育の時間の多い少ないは本質的な問題ではないと思うからである。自分自身の中学校時代を思い起こしてほしい。英語の時間が2倍あったからといって、英語がもっとしゃべれるようになったかどうか。多分、

私の場合は否である。

それでは、香港の人達が少なくとも日本人より英語の会話力があり、グローバルスタンダードな考え方や行動をそれなりに身につけているように見えるのはなぜだろうか。私は次の2つの要素が日本と決定的に違うからだと思っている。

1つ目は、香港では日本に比べて圧倒的に外国人定住比率が高いことである。これは、歴史的に植民地時代が長く、必然的に英国人をはじめとした西洋人が、定住できる環境が整えられてきたことに起因する。その結果、実生活のなかでごく当たり前に異国の文化、言葉に親しむことができたのである。この場合、「実生活の中でごく自然に」というのが重要なのである。

2つ目は、香港の場合、英語をしゃべることが、自分の収入増に結びつきやすいということである。語学習得や外国人と接することへのインセンティブが圧倒的に高いのである。日本であれば、そもそもまわりに外国人が少ないのだから、英語ができるとか外国人の考え方を理解した仕事ができるといったことは、通常の企業活動では大きな意味をもたない。

つまり日本では英語力向上への強い動機が存在しないのである。香港のサンドイッチ屋さんの英語が十分達者なのは、この辺に起因するのだと思う。

ところで、時代の最先端を行っているはず

の日本のIT（情報技術）産業におけるグローバルスタンダード化は、どの程度進んでいるのだろうか。残念ながら一部を除いては相当遅れていると言わざるを得ない。

たとえば、IBM社やマイクロソフト社の製品をはじめ大多数の基本ソフトが英語で書かれている。このような環境の中で、日本のIT産業が日本語に固執せざるを得ないことに起因するさまざまな弊害は、金額に換算すれば天文学的な数字になるのではなからうか。日本語版ソフト導入のための労力とタイミングの遅れ、技術者研修のための膨大な日本語化作業……。英語だったら、一日の遅れもなく情報が取得できるのに、である。

本来、日本のIT産業こそが、グローバルスタンダード化の尖兵でなくてはならぬのにその実態はお寒い限りである。かといってやみくもに英語普及だけを唱えておればいいものでもない。

まずは、国内外を問わず身近な事業の中で外国企業と頻繁に接する具体的な案件を1つひとつ立ち上げ、さまざまな経験を地道に積み上げていくことが何よりも重要であろう。

この活動を通じて、語学も含めた個々人のグローバルスタンダード化への動機が醸成され、大きなうねりとなって進み出せば、知らず知らずのうちに、グローバルスタンダードに近づいていくに違いない。

（NRIラーニングネットワーク 杉山由高）